

知的障害特別支援学校における国際理解教育の充実に向けた試み —韓国言語と文化に着目して—

任 龍在^{1)*}・申 秀玫²⁾・高野美月³⁾・佐久間智大⁴⁾・細川かおり¹⁾

¹⁾千葉大学・教育学部

²⁾千葉大学・文学部・学部生

³⁾千葉大学・教育学部・学部生

⁴⁾千葉大学教育学部附属特別支援学校

An Attempt to Enhance the Education for International Understanding in Special School for Children with Intellectual Disability: Focusing on Korean Language and Culture

LIM Yongjae^{1)*}, SHIN Sumin²⁾, TAKANO Mitsuki³⁾, SAKUMA Tomohiro⁴⁾ and HOSOKAWA Kaori¹⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Letters, Chiba University, Japan; Undergraduate student

³⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan; Undergraduate student

⁴⁾Special Needs Education School Attached to Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、知的障害特別支援学校における国際理解教育の充実に向けた試みとして韓国の言語と文化に着目した授業を行い、授業の準備・実施・評価の一連のプロセスを分析し、国際理解教育が知的障害特別支援学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられるためのヒントを得ることを目的とした。授業者は学部生6名（韓国人4名、日本人2名）であり、知的障害特別支援学校中学部の生徒18名を対象に授業を行った。分析は、授業の準備過程と授業当日の映像、当日の指導案、そして授業後に調査した質問紙をもとに行った。本研究により、国際理解教育が知的障害特別支援学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられるためには、授業に対する見方・考え方の違いを尊重すること、授業に参加する校内外の関係者間の連携及び協力、授業に関する先行研究及び関連資料等の有効な活用が重要と推察された。今後、本研究で得られた知見をもとに、国際理解教育の実践研究を続けていきたい。

キーワード：知的障害 (Intellectual Disability)、国際理解教育 (Education for International Understanding)、韓国 (Korea)

1. 研究の所在と目的

近年、グローバル化（グローバリゼーション）という言葉をよく耳にする。学校現場においても、多様な文化や言語への理解を深めるための国際理解教育を推進しており、国際社会で活躍できる人材を育成しようとしている。

学校現場における国際理解教育を論じる際によく言及される文書としては、ユネスコ（1974）の『国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告』と中央教育審議会（1974）の答申『教育・学術・文化における国際交流について』があげられる。この答申では、「国際社会に生きる日本人」の育成が急務と指摘し、「小・中・高等学校における国際理解教育の振興のために教育内容・方法を改善するとともに、国際理解のための実践的活動を行う場の拡大についても考慮すること」を重要と説明している。その後、この答申の方針は、臨時教育審議会（1985～1987）の『教育改革に関する答申』に引き継がれ、「国際化に対応した教育の推進」が教育改革の柱の一つとし

て位置付けられた。こうした経緯をふまえ、中央教育審議会（1996）の答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』では、「国際理解教育の充実」が「国際化と教育」の柱の一つとしてとりあげ、国際理解教育の在り方を以下のように定めた。

国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものである。この教育を実りのあるものにするためには、単に知識理解にとどめることなく、体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れて、実践的な態度や資質、能力を育成していく必要がある。そのためには、国際的な情報通信ネットワークの活用をはじめ、様々な機器や教材の活用のほか、これらの教育にふさわしい人材を学校外から積極的に招くことなども考えられてよいだろう。指導の在り方としては、国際理解教育が総合的な教育活動であることを踏まえて、「総合的な学習の時間」を活用した取組も考えられよう。

国際理解教育が学校現場で広く実践されるようになったのは、2000年から始められた「総合的な学習の時間」がきっかけである。約20年を経た現在でも、学校現場で

*連絡先著者：任 龍在 im@chiba-u.jp

は、「総合的な学習の時間」をはじめ、外国語活動や英語、道徳の授業、学校行事や部活などの特別活動を通じて、様々な国際理解教育が実践されている。全ての小・中・高等学校が何等かの形で国際理解教育を行っていると言っても過言ではない時代である。

一方、知的障害のある児童生徒を対象とする特別支援学校（以下、知的障害特別支援学校）では、小・中・高等学校はもちろん、他の障害種の特別支援学校と比べても、国際理解教育への関心が低く、実践例も少ない状況である。また、国際理解教育を行っている学校も、特別授業やイベントとして実施する単発的な取組みが多く、学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられた事例はほとんど見られない。特別授業やイベントの内容としては、オリンピック・パラリンピック、外国人（主に、留学生）との交流授業、海外の協定校との交流授業などがあげられる。知的障害特別支援学校では、国際理解教育を日々の実践の一部として取り込もうとせず、教職員の負担を減らすため、校外の人的・物的資源を活用して済ませようとする傾向が強いといえよう。地方自治体によっては、東京都特別支援教育推進計画（東京都教育委員会、2017、2022）のように、該当地域の特別支援教育を推進するために策定した長期計画の一部として国際理解教育を言及している場合もある。しかし、これらの計画も形式的なものにとどまり、国際理解教育を学校の継続的な取組みの1つとして位置付けようとする具体的なアクションに結びついていない場合がほとんどである。

そこで本研究では、知的障害特別支援学校における国際理解教育の充実に向けた試みとして韓国の言語と文化に着目した授業を行い、授業の準備・実施・評価の一連のプロセスを分析し、国際理解教育が知的障害特別支援学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられるためのヒントを得ることを目的とした。

2. 方 法

(1) 本研究の対象となった学校と生徒の概要

本研究の対象校であるA学校は、B大学教育学部附属特別支援学校である。A学校は、小・中学部及び高等部で構成され、知的障害のある児童生徒を対象とする特別支援学校である。2022年10月現在、60名の児童生徒が在籍しており、本研究の対象である中学部に在籍する生徒は18名であった。18名の知的障害の程度は、軽度から重

度まで様々であり、生徒一人一人の発達段階でバラツキが見られた。なお、A学校は韓国の知的障害特別支援学校と交流協定を締結し、定期的な交流を行っている。

(2) 授業者

2022年5月、B大学の学生（交換留学生を含む）を対象として、A学校における国際理解教育の充実に向けた試み、すなわち本研究で企画する授業（韓国の言語と文化）の趣旨と日程に関する説明会を行った後、参加希望者を募集した。その結果、学生6名（韓国人4名、日本人2名）が選定された。学生6名の個人属性は表1の通りである。

(3) 授業の準備と実施、そして評価

まず、授業者には、日韓の特別支援教育に関する資料及び特別支援学校の映像を提供し、事前学習の機会を与えた。次に、2022年7月に実施された授業を準備するために、A学校の見学を含む計7回の打ち合わせを行った。授業の準備過程（学校見学を除いた計6回の打ち合わせ）については、授業者の同意を得て映像を撮影した。また、当日の授業についても、A学校の同意を得て映像を撮影した。これらの映像は授業の準備過程を分析するための基礎資料であった。授業終了後には、授業評価という観点から、主たる授業者2名（韓国人1名、日本人1名）と当日の授業に参加したA学校中学部教員6名を対象として質問紙調査を行った。質問項目は、授業の良かった点・悪かった点・改善すべき点であり、それぞれについて自由に記述してもらった。

(4) 分析

第一に、当日の授業に至るまでの準備過程を分析した。まず、各打ち合わせで検討された案を時間順に整理した後、それぞれの検討案が授業の「内容」に関するものなのか、「方法」に関するものなのか分類した。次に、検討案が当日の授業に採択されたか否かを確認し、「採択」「一部採択」「不採択」と分類した。最後に、検討案の採択・不採択の理由をまとめた。

第二に、主たる授業者2名（韓国人1名、日本人1名）と当日の授業に参加したA学校中学部教員6名の授業の評価（良かった点・悪かった点・改善すべき点）を比較検討し、韓国の言語と文化に着目した授業をはじめ、国際理解教育が知的障害特別支援学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられるためのヒントをまとめた。

表1 授業者の個人属性

学生	国籍	性別	専攻・学年	備考
a	韓国	女	人文学3年	
b	韓国	男	日本語学（韓国X大学）3年	交換留学生
c	韓国	女	日本語学（韓国X大学）4年	交換留学生
d	韓国	女	文献情報学（韓国Y大学）3年	交換留学生
e	日本	女	特別支援教育4年	教育実習履修済み
f	日本	女	特別支援教育3年	

3. 結 果

(1) 授業の準備過程

授業の準備過程については、それぞれの検討案を「内容」と「方法」に分け、当日の授業への採択状況を考慮

して「採択」「一部採択」「不採択」と分類した。また、採択・不採択の理由をまとめ、重要な部分を下線（採択理由：一重線、不採択理由：二重線）で示した。授業の準備過程は表2に示した。

表2 授業の準備過程

日 時	検討案	採択・不採択の理由
6月17日 12:00~13:00 (第1回目)	【採択】 方法 ①動画の活用	・生徒の関心を高めるのに動画を使用することにした。また、A学校の普段の授業や活動においても動画の使用率が高いことを考慮した。
	【一部採択】 内容 ②韓国の言語と文化の紹介 ・言語:ハンガルの名札作り, 自己紹介 ・文化:歌(童謡, K-POP), 食べ物, 歴史	・言語:授業の内容は、言語の基本である名前と挨拶に注目し、ハンガルの名札作りと韓国語での自己紹介を学ぶことにした。 ・文化:歌と食べ物が生徒の興味を引き出せると考え、これらを中心に授業を計画することにした。特に、歌はA学校の普段の授業で有効に活用されており、生徒の大半が歌やダンスによく反応することを考慮した。また、一回のみの授業であるため、 <u>長時間の説明を要する歴史よりも歌のほうがよいと考えた。</u>
	【一部採択】 方法 ③生徒の発達段階をふまえた授業(内容と方法)	・授業の内容は全員同様であるが、方法を工夫し発達段階をふまえた授業にする。一人一人に応じた授業を進めたいが、生徒の発達段階の差が幅広いため、普段の関わりのない授業者が上手く対応できないと判断。
	【不採択】 方法 ④グループワーク ※関連:③	・生徒の発達段階をふまえた授業案(方法)としてグループワークを検討。しかし、60分程度で授業時間が短く、 <u>知的障害児のグループワークに関する知識が少ないため、グループワークを無理やり取り入れないほうがよいと考えられた。</u>
	【採択】 内容 ⑤家族に感想を話したくなる授業	・普段韓国の言語や文化に接する機会が少ないため、 <u>今回を契機に好印象を与えるとともに、家族に紹介・自慢できる記念品(例:ハンガルの名札)を作る時間を設けたいと思った。</u>
6月24日 11:00~13:00 (第2回目:学校見学を含む)	【採択】 方法 ⑥生徒の参加度を高める授業 ※関連:②	・参加型授業を行い生徒の興味を高めたいと思った。授業者とのやりとり、発表の機会(自己紹介)、身体活動(歌とダンス)などの割合を高める。
	【採択】 方法 ⑦一人一人に応じた授業(1:1の場面を設けること) ※関連:③④⑥	・一人一人に応じた授業を行い、生徒の参加度と満足度の高い授業を行いと思った。 ・グループワークの代わりに、1:1の場面を設け、生徒の発達段階をふまえた授業を行う可能性が高くなり、授業者と生徒の親密度を高めることができると判断した。 ・授業者(6名)と中学部教員(8名)を合わせると、生徒18名をほぼ1:1で担当できる。知的障害教育に関する知識と経験の不足で授業者が対応し難い生徒の場合、教員に一任することもできる。
7月1日 21:00~22:00 (第3回目)	【不採択】 内容 ⑧イオンモールと韓国のショッピングモールとの比較 ※関連:②	・食べ物の関連から、イオンモールと韓国のショッピングモール(ロッテマートなど)との比較が提案された。しかし、 <u>授業の目的と趣旨に合わないこと、授業者の説明が長くなりそうな内容は望ましくないこと、イオンモールを使用していない生徒の興味が下がること、などを理由で不採択。</u>
	【採択】 内容 方法 ⑨塗り絵の活用 ※関連:②⑤⑥⑦⑩	・記念品作りと参加型授業の一環として名札作りに塗り絵を活用する。生徒の名前(ハンガル)を塗り絵とする。 ・授業者は、生徒が塗り絵で使用する色を見て、生徒の好きな色を把握することができる。
	【採択】 内容 ⑩好きな食べ物や色を紹介すること(自己紹介) ※関連:②⑥	・日本では、小中学生が自己紹介をする際に名前、所属、好きなものを話すことが多く、好きな食べ物や色は知的障害児も親しみのあるものと考えられた。 ・好きな食べ物や色は、文化の差を感じ難く、共通理解を図りやすいと判断した。

7月2日 16:00~17:00 (第4回目)	【採択】 内容 ⑪ダンスの活用 ※関連: ①②⑥	・名札作り(塗り絵を含む)が微細運動であるため、ダンス(粗大運動)を取り入れ、 <u>身体活動のバランスをとりたいと思った。</u>
	【採択】 方法 ⑫名札はA4(横長)サイズにすること ※関連: ②⑨	・塗り絵をすることを考えると、時間の都合上A4サイズが適切だと判断した。 ・名前(ハングル)を表記するには、A4サイズでも十分である。
	【不採択】 内容 ⑬ハングルの母音と子音を組み合わせる言葉をつくるゲーム	・韓国で流行っているゲームを紹介したい気持ちが強かったが、 <u>ルールの説明と理解に時間がかかること、難易度の設定が困難であること、一人一人の発達段階に適切か否かがよく分からないこと、などを理由で不採択。</u>
	【採択】 方法 ⑭簡潔かつ明確に話すこと ※関連: ③⑦	・生徒の知的障害(発達段階)を考慮し、やさしい日本語を用い簡潔かつ明確に話すことについて、授業者間で共通理解を図った。
	【採択】 方法 ⑮発言や発表は挙手制にすること	・授業時間が短いため、発言や発表は挙手制にする。重度の知的障害をもつ生徒の参加が難しいという指摘があったが、挙手制よりもよい案が出てこなかった。重度の知的障害をもつ生徒の参加促進は課題。
7月4日 20:00~21:00 (第5回目)	【不採択】 内容 ⑯好きな食べ物を果物に変更すること ※関連: ②⑥⑩	・好きな食べ物の範囲が広いと、好きな果物のみ限定することはどうかという案が出た。しかし、 <u>果物が苦手な生徒がいることを考慮し、不採択。</u>
	【採択】 内容 ⑰歌は、韓国童謡「サントッキ」(山ウサギ)にすること ※関連: ①⑥⑪	・サントッキは、韓国でよく知られている童謡の1つであり、リズムやメロディーが簡単。 <u>ウサギの特徴(長い耳とぴょんぴょんと跳ねるジャンプ)を用いたダンスが真似しやすいことから、この歌にした。</u>
	【採択】 内容 ⑱授業のはじめに授業者が自己紹介を行うこと	・授業者がだれかを認識させる。 ・授業者4名が韓国人であることに気づかせ、 <u>国際理解授業であることを分かるようにする。</u>
	【採択】 内容 方法 ⑲役割分担	・授業者の性格と特技を考慮し、授業の内容と方法等に相応しい役割分担を行った。また、授業の準備についても役割分担を行った。
7月5日 19:00~20:00 (第6回目)	【採択】 方法 ⑳時計のイラストの活用	・授業の開始、進行、終了の時刻を分かりやすくするために、 <u>時計のイラスト(時刻の可視化)を活用することにした。</u> ・時計のイラストは、A学校の普段の授業や活動においてもよく活用されており、生徒が見通しをもって授業や活動に参加する手がかかりになっている。
	【採択】 方法 ㉑授業のはじめと終わりの挨拶にマカトンサインを用いること	・A学校では、授業のはじめと終わりにマカトンサインを用いて挨拶をしている。 <u>普段通りに挨拶することにより、生徒の安心感を高めることができると思った。</u>
7月9日 15:00~17:00 (第7回目)	最終確認とリハーサル	変更なし

(2) 授業の内容と流れ(当日)

当日の授業の内容は、ハングルの名札作り、韓国語での自己紹介、そして韓国の童謡に合わせたダンスで構成された。授業の方法としては、主に生徒の発達段階を考慮した参加型授業を目指した。当日の授業の内容と流れは表3に示した。

(3) 授業の評価

授業の評価については、主たる授業者2名(韓国人1名、日本人1名)と当日の授業に参加したA学校中学部教員6名の授業の評価を比較検討した。授業の評価については、良かった点(表4)、悪かった点(表5)、そして改善すべき点(表6)の順に示した。また、重要な部分は下線で示した。

表3 授業の内容と流れ(当日)

時間	題目	内容(○授業者/●生徒)
10:45	挨拶	マカトンサインを用いて授業をはじめる挨拶を行う。
10:45 (5分)	授業者の紹介	○自己紹介をする。 ●授業者がだれか確認する。
10:50 (5分)	授業の内容と 流れの説明	○授業の内容と流れについて、スライドを用いて簡略に説明する。 ※スライドには授業の内容と時計のイラストを描き、その説明は簡単な文章で記載した。 ●授業の内容と流れを確認し、活動への見通しをもつ。
10:55 (15分)	名札作り	○生徒の名前(ハングルとふりがな)が縁取りフォントで記載されたA4用紙を渡し、文字塗り絵をさせる。このA4用紙が生徒の名札になる。 ●好きな色で文字塗り絵をする。文字塗り絵を終えた生徒は、授業者とやりとりをしながら(「好きな食べ物は何?」「メロンです」「では、メロンを書いてみるか?」など)余白に好きな食べ物を描く。 ○生徒が好きな食べ物を描くと、食べ物の名前をハングルで書き、その上に日本語でふりがなを書いてあげる。
11:10 (10分)	韓国語での自 己紹介	○韓国語での自己紹介を教える。 例文:私はヒナコです。私はメロンが好きです。 저는 히나코입니다. 저는 메론을 좋아합니다. ●(挙手した生徒を中心に)韓国語で自己紹介をする。
11:20 (10分)	ダンス	○サントッキの動画を再生し、一緒に歌いながら踊る。また、ポイントになる動作を繰り返しながら踊って、生徒が真似できるようにする。 ●授業者の動作を真似して踊ってみる。 ※サントッキの動画サイト https://www.youtube.com/watch?v=OCK9L2PGZCI&ab
11:30	挨拶	マカトンサインを用いて授業を終える挨拶を行う。

表4 授業の評価(良かった点)

授業者(韓国人)	授業者(日本人)	A学校中学部教員(6名)
<ul style="list-style-type: none"> ・障害のある生徒との交流により、<u>障害理解を深めるきっかけになった。</u> ・授業により、<u>障害者とのふれあい方、向き合い方を学ぶことができた。</u> ・韓国の言語と文化を紹介することにより、<u>生徒の韓国への関心が高まることを期待する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・何よりも楽しい授業を行うことができ、生徒も授業者も満足できた。 ・<u>教育実習で担当した生徒が授業に積極的に参加しようとしており、そのような姿を見て嬉しかった。</u> ・<u>生徒一人一人の思いや考えをふまえた授業ができてよかった。</u>例えば、好きなものを聞き、それを韓国語で何と言うか伝えるなど、個人の満足度を上げられる授業構成にできたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国への興味・関心をもつことができた生徒が何人かいた。 ・<u>授業に積極的に参加しようとする生徒がいてよかった。</u>積極的に発信したり、自分の好きなものを韓国語でどのように言うのかを知りたがったりしていた。 ・<u>名札作りの時に、授業者が生徒に話しかけたり、いろいろと関わってくれたりしたので、生徒たちも楽しそうに活動を進めていた。</u>

4. 考 察

本授業で実施された授業により、国際理解教育が知的障害特別支援学校の継続的な取組みの1つとして位置付けられるためには、授業に対する見方・考え方の違いを尊重すること、授業に参加する校内外の関係者間の連携及び協力、授業に関する先行研究及び関連資料等の有効な活用が重要と考えられた。

まず、授業に対する見方・考え方の違いを尊重することは、授業の参加者それぞれが満足感ややりがいを感ぜやすくなる前提である。これは、授業の「良かった点」によく見られる(表4)。A学校中学部教員6名は、生

徒の観点からの気持ちや満足感を回答している。たとえば、「韓国への興味・関心をもつことができた生徒が何人かいた」「授業に積極的に参加しようとする生徒がいてよかった」「授業者が生徒に話しかけたり、いろいろと関わってくれたりしたので、生徒たちも楽しそうに活動を進めていた」など。一方、授業者(韓国人1名、日本人1名)は生徒の気持ちも重要視しているが、それに加えて、彼ら自身の気持ちと満足感についても大事にしていることが特徴づけられる。韓国人授業者は「障害理解を深めるきっかけになった」「障害者とのふれあい方、向き合い方を学ぶことができた」と障害理解を深めることができたという満足感を感じていた。日本人授業者は

表5 授業の評価（悪かった点）

授業者（韓国人）	授業者（日本人）	A学校中学部教員（6名）
<ul style="list-style-type: none"> ・授業者間でモチベーションの差があり、<u>役割分担にバランスがとれていなかった。</u> ・知的障害教育への知識と経験がないし、<u>どのようにすればよいか分からないことが少なくなかった。</u> ・<u>生徒の発達段階と学習能力にばらつきがあり、授業の内容と方法を決めることが難しい</u>と思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・名札の工夫が必要である。発表用のセリフを名札の裏に書いてなかったことから、生徒が韓国語で名前と好きなものを発表する時に困っていた。 ・授業者の準備不足で、マジックペンとテープなどを学校から借りた。基本的には、学校の備品を借りることなく授業ができたよかったですのと思った。 ・<u>時間管理</u>。教育実習経験をふまえて時計をイラストで作成したが、授業開始時刻や各活動でのズレが積み重なり、スライドの時計が無意味なものになった。時間管理の徹底と時計の工夫が必要。時計は文字盤だけ書いてあってその場で針を書き込むかたちにすればよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の見通しが必要な生徒が多いので、なるべく時間通りに進められるような配慮が必要である。 ※授業当日、交通事故によりバスの遅延が生じ、計画よりも授業の開始が15分程度遅れた。 ・授業者のなかで、<u>誰がメインなのか分かりづらかった。</u>

表6 授業の評価（改善すべき点）

授業者（韓国人）	授業者（日本人）	A学校中学部教員（6名）
<ul style="list-style-type: none"> ・モチベーション、日本語力、特技などを総合的に考慮して授業者を選抜する。 ・授業の内容（言語or文化）をある程度決めてもらえればよい。授業者の裁量に一任することがありがたい側面もあるが、知的障害教育への知識と経験が足りないことで、授業内容の検討だけでも長い時間がかかり、授業準備に十分に力を入れることができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナにより、非対面で授業の準備をした。模擬授業とまでは行かなくても、一度対面で、学生同士で集まって、<u>授業の予行練習ができればよりよい</u>と思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「好きなものを描く」というのは、実態として難しい生徒が多い。<u>イラストで選べるように</u>すること。 ・1年生からすると、特にいきなり韓国交流が始まった感じがするので、導入（学習の目的等）があると良い。 ・韓国について、<u>どんなところか（食べ物、民族衣装、アイドルなど）を話してもらうことでもっと生徒の興味を高めることができる。</u> ・「あたま、肩、膝、ボン」など、<u>生徒たちの知っている曲（歌詞は異なるが、日本語も韓国語もある曲等）を選んでもらえると、もう少し共通認識を図りやすかったかも</u>知れない。

「何よりも楽しい授業を行うことができ、生徒も授業者も満足できた」「教育実習で担当した生徒が授業に積極的に参加しようとしており、そのような姿を見て嬉しかった」としており、教育実習の事後実習と類似な気持ちを感じていた。このため、校外の人的資源（留学生等）を活用する授業を企画する際には、彼らの授業に対する見方・考え方を尊重することに留意する必要がある。

次に、授業に参加する校内外の関係者間の連携及び協力は、校外の授業者が知的障害のある児童生徒の実態を適切に把握し、授業の内容と方法を適切に選定するための土台である。本研究の授業者は、よりよい参加型授業を行いたいと思い、生徒一人一人の発達段階をふまえて授業の内容と方法を選定しようとしたが、彼らが思う通りにはいかなかった。これについて、韓国人授業者は、授業の悪かった点として「知的障害教育への知識と経験がないし、どのようにすればよいか分からないことが少

なくなかった」「生徒の発達段階と学習能力にばらつきがあり、授業の内容と方法を決めることが難しいと思った」と述べ、その改善すべき点として「授業の内容（言語or文化）をある程度決めてもらえればよい」ことと提案した。本研究で実施された授業は、単発的な特別授業やイベントと比べ、授業の準備過程に時間をかけていたが、障害児・者との接触経験が少なく、特別支援教育を専攻していない彼らにとっては、授業の内容と方法を選定することは彼らの能力を超えることといえる。彼らが感じるこのような困難を解消しないならば、よりよい授業作りに支障が出ることは当然のことであり、今回のような授業や活動に参加したい気持ちなくなる理由になるかも知れない。

このような問題を解消するには、A学校中学部教員の改善すべき点への回答が参考になる。彼らの回答では授業で何をどのように取り組めばよいかという提案が含ま

れている。たとえば、『好きなものを描く』というのは、実態として難しい生徒が多い。イラストで選べるようにすること「韓国について、どんなところか（食べもの、民族衣装、アイドルなど）を話してもらってことでもっと生徒の興味を高めることができる」『あたま、肩、膝、ボン』など、生徒たちの知っている曲（歌詞は異なるが、日本語も韓国語もある曲等）を選んでもらえると、もう少し共通認識を図りやすかったかも知れない」など。今回の授業は、国際理解教育の充実に向けた試みという観点から、A学校中学部教員にできるだけ負担をかけずに授業を準備・実施してみようとしたが、その結果、彼らから以上のような良い案を得ることができなかった。今後、国際理解教育を知的障害特別支援学校の継続的な取り組みの1つとして位置付けるために、次回の授業を企画する際には、日韓の特別支援教育に関する資料及び特別支援学校の映像を提供、学校見学などに加え、対象となる生徒を担当している教員との協議時間を必ず設けたいと思う。そのためには、教員の国際理解教育への理解向上を図り、今回のような授業を企画する際には、校内外の関係者間の連携及び協力が円滑に機能するようになる必要がある。

最後に、授業に関する先行研究及び関連資料等の有効な活用は、授業者の授業力の向上につながる。本研究の授業者には、日韓の特別支援教育に関する資料及び特別支援学校の映像を提供したが、知的障害特別支援学校における国際理解教育に関する資料等が少ないため、今回の授業作りに直接参考になる資料がほとんどなかった。したがって、今後、オリンピック・パラリンピック（中村，2021）、料理や外国語活動（東京都教育委員会，2021）などの既存の資料を整理するとともに、本研究のような新たな実践研究を続けて行って、関連資料を蓄積していくことが必要である。

付 記

本研究は、令和4年度千葉大学教育学部附属学校園間連携研究と科研費（22K02781）の助成を受けたものである。

引用文献

- 中央教育審議会（1974）教育・学術・文化における国際交流について（答申，1974年5月27日）
- 中央教育審議会（1996）21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申，1996年7月19日）
- 中村晋（2021）知的障害特別支援学校における国際理解教育：オリンピック・パラリンピック教育の実践から。国際理解教育，27，pp.75-80.
- 臨時教育審議会（1985）教育改革に関する第一次答申（1985年6月26日）
- 臨時教育審議会（1986）教育改革に関する第二次答申（1986年4月23日）
- 臨時教育審議会（1987a）教育改革に関する第三次答申（1987年4月1日）
- 臨時教育審議会（1987b）教育改革に関する第IV次答申（1987年8月7日）
- 東京都教育委員会（2017）東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画（2017～2021年）。東京都教育庁指導部特別支援教育指導課。
- 東京都教育委員会（2021）特別支援学校における国際理解教育の充実（東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画に基づく特別支援学校における特別支援教育の充実事業指導資料）。東京都教育庁指導部特別支援教育指導課。
- 東京都教育委員会（2022）東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第二次実施計画（2022～2024年）。東京都教育庁指導部特別支援教育指導課。
- ユネスコ（1974）国際理解，国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告（1974年11月19日 第18回総会採択）。
http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=13088&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html
 （原文，最終閲覧日：2022年10月9日）
<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1387221.htm>
 （和訳，最終閲覧日：2022年10月9日）